

最も短い詩としての俳句の性格（IV）

山口 青邨

かうした極度に短い詩形——このことはたくさんの制限をするものをもつ必要があった、どうしてこの短いものの中にたくさんの内容を盛るか、複雑なものを盛るか——このことのために數百年たくさんの人達が苦心をして來たのである。

たくさんものを盛る、複雑なことを盛る——さういふことは結局不可能なことであつた。そこでどうしてたくさんのことを減らすか、複雑なことを單純化するかといふことに苦心したのである。俳句は結局はこの單純化といふ處理法に歸するのであつた。

これがためにはいろいろの表現法が發明されたり、研究されたりした、季題といふものの發明とその巧妙な使用もその一つである。

いろいろの切字などから来る餘韻といふものが重視された、さういふものに對する感覺はまた作者ばかりでなく、鑑賞者側に要請され、訓練されなければならなかつた、日本の文化の或る面はかうしたしつけに似たものを多分に含んでゐる。

少くとも過去の——子規が俳句の革命を企てるまではさうしたこと
が非常に嚴格であつた。

後年虚子等が寫生を實踐し、俳句の分野を廣くし、その材料の自由を認め、新季題の増加、切字等の奔放をゆるしたことによつて、俳句は随分豁達な姿になつた。

しかもなほ五・七・五、十七字、有季といふ枠は外されないのである、これ以上に出れば俳句の構成が破壊され、俳句としての性格が失はれるからである。

俳句に於ける單純化といふことはまた象徴といふことの尊重にもなるのであつた。端的に人の感情に食ひこむ方法が當然選ばれなければならぬ。